

＜書評論文＞

ルーマン理論における近代像

Niklas Luhmann, *Beobachtungen der Moderne*.
(Westdeutscher Verlag, 1992)

小 島 剛

はじめに

近代をどのように特徴づけるのか、という問いかけは草創期の社会学者たちにとっては同時代的な問題であり、社会学が始まって以来問われ続けてきた問題であった。社会学という学問それ自体が近代化という現象を説明するために始まったとしても過言ではないだろう。ウェーバーやデュルケムといった社会学者の社会理論はそのまま近代化の説明原理としても読むことができる。さらに近年になって近代が大きな行き詰まりを見せていることが誰の目にも明らかになり、政治、経済、教育などの分野における限界、環境問題やフェミニズムなどの新しい問題が生じてきている。このような問題に対してあらゆる社会学者が何らかの回答を求められている、と言えるのだが、ドイツの社会学者、N・ルーマンも例外ではない。本書は彼の手による近代化論であるが、すでに近代化を研究の中心にすえてきたA・ギデンズやU・ベックらとは一線を画してきたルーマンの近代化論ということで興味深い著作である。

本書は5つの章で成り立っており、各表題は 1, 近代社会におけるモダニティ 2, ヨーロッパの合理性 3, 近代社会の固有特性としてのコンティンジェンシー 4, 未来の描写 5, 無知のエコロジーとなっている。これを書評するに当たり、まず次に続く節で、1, 3章からルーマンの言う近代化のエッセンスを取り出し、その次の節で観察という概念を中心としてその理論的背景について確認する。その後、2章の合理性、4章の未来の描写、5章のエコロジーについて順に節を設け、触れていく。

1 ルーマンの見る近代化

ルーマンは自らが作り上げたシステム論を用いて広大な範囲に及ぶ歴史的考察をしている。歴史認識については彼は伝統的な機能主義者であり、歴史を段階的に環節的分化→成層的分化→機能的分化

と捉えている。ここで特に重要なのは近代化への移行を意味する機能的分化である。彼にとって機能的分化とは「一つの統一された社会」が様々な自己準拠的で閉鎖的なシステム（＝オートポイエーシスシステム）に分化していくことを意味している。だから彼にとって近代化を論じる、ということは神や自然、倫理などによって「一つのもの」として記述されていた社会が、その中に様々な矛盾を見出し、法や科学、経済システムなどへと分化を余儀なくされていく過程を言うのである。

その歴史的な考察が本書の第三章で行われており、様々なシステムの成立過程が述べられている。ここでは法、科学、政治についてみてみよう。

まず、法について。16～17世紀においては神学的考察は「自然」の概念を借りて行われていたのであるが、特に法の領域ではそれは自然法として法の根拠となっていた。自然法はその存在根拠を自然という法現象の外部に依拠していたのである。しかし18世紀にはいると自然法の根拠が実際の法使用の矛盾にさらされるようになり、法の実定化が進むようになる。それによって、法は自らの用いる差異に従って、何がどのように決定されたのか、またこれからどのような決定がなされるのかを観察する状況を作り出す。法は法／不法などの独自の観察道具としての二元コードを確立し、閉鎖的自己準拠性を獲得したのである。

科学は出版技術の出現によって自己を無条件に真理として示すことができなくなっていく。出版技術が多く情報を提供し始めると、ある知識が提出される際に、その知識がどのように得られたのかを観察することが可能になる。つまり、ある観察（＝得られた知識）がどのようになされたのが観察されるのである。この場合ある研究はその研究自身の手で自身の正当性を主張することができない。常に他の観察によって訂正を受ける可能性を残すからである。古典的な学問はこのような、観察を観察し得る可能性に、主観性の排除を期待したのであり、我々はここに学問システムの強い独立性、形式性を見いだすことができるのである。

政治についても同じことが言える。近代以前の段階においては政治システムについてその根拠の提示を求められるということではなかった。しかし、19世紀以降政治が公論に向かって絶えず方向付けされて以来、政治は公論を政治家がどのように自分自身と特定の問題を把握するのかを見る鏡として用いている。つまり、政治は公論を通して自己の観察を観察する必要に迫られているのであり、ここにも、観察の観察という図式が見られるのである。

以上の簡略な紹介から、以下のようにルーマンのみる近代化をまとめられる。つまり、近代化とともに、諸システムが自明としてきた存在意義が剥奪されていること、そしてそのような超越論的＝外部的観察によって与えられた基礎づけに代わり、システム内的な観察をシステムそれ自体が再帰的に観察の対象とするようになったこと、さらに、そのことがシステムに閉鎖的な自己準拠性を与えるようになった、ということなのである。

2 観察

このような諸例に示されるように、ルーマンはその近代化の指標としての機能分化を独自の観察を行う閉鎖的で自己準拠的なシステムの分出として捉えている。このようなシステムにはどのような特徴があるのだろうか？また、このようなシステムが分出した近代には一体どのような特徴があるのだろうか？

これらの問いに答えるためには今まで説明せずに来た観察概念についてより深く知る必要がある。観察とはシステムがそれ独自の差異を設け、そのうち一方を指示すること、と定義される。たとえば法なら法／不法の差異のうちどちらか一方を指示することによってあらゆる対象に法的観察が適用できる。

また、ここで用いられた差異はそれ自体が観察の対象となることができる。先に、近代化の中で分化していった諸機能システムはある観察を再帰的に観察の対象とすることによって閉鎖的な自己準拠性を獲得した、と書いたが、これはこのような「セカンドオーダー観察」がシステム内の作動によって可能になることが機能分化の必要条件になっていたということなのである。

ただし、この「観察の観察」ということは特権的、客観的に社会を観察できるということ意味するものではない。観察はそれ自体の持つ二元コード（法システムにおける法／不法など）によって対象を認識できるが、同時にそのコードによって見るができないものは見ることはできない。コードは観察を保証するものであると同時に観察に盲点を与え、観察を束縛するのである。

そして、観察概念は時間について考慮することを要請する。本来観察とは差異を設け、そのうちの一方を指示することをいうのであるが、システムはこの二つの作動を同時に行うことはできず、観察それ自体は自らが差異を使って観察を行っていることを知ることができないのである。そのために観察を観察するセカンドオーダーレベルの観察も、自らの持つ束縛から逃れられない。だから、確かにセカンドオーダー観察はファーストオーダー観察が見ることができなかったものを見ることができけれども、セカンドオーダー観察はファーストオーダー観察を見る、という点においてはファーストオーダー観察にとどまるのであり、それ自体の盲点を克服することはできないのである。

さらに、観察が差異を用いて行われるに当たり、パラドクスという問題について考えておく必要がある。パラドクスの代表例は「すべてのクレタ人はうそつきである」というエピソードのパラドクスであるが、この命題の問題点は真／偽-差異が自己自身に帰される所に生じている。つまり差異はその差異自体に適用されることができず、あらゆる差異はその差異自体によって自らの存在証明を行うことができないのである。そのために近代の諸システムはその同一性を保持し、その存在理由を供給するために戦略を採る必要がある。これを脱パラドクス化、というが、このことは近代諸機能システムに重大な帰結をもたらす。つまり、これらのシステムはその観察の正当性の保証を失っているのであり、近代以降の世界はこのような不完全な観察の集合としてしか現れてはこないのである。これ

は近代における法や、貨幣、国家、などが、より精緻になり、広大な範囲に渡って微視的に浸透しているにもかかわらず、その実体が実は空虚なものなのであり、この空虚さを覆い隠すために様々な戦略が採られていることと符合している。

このように、不完全な観察の併存としての近代以降の社会の記述をルーマンは自ら構成主義 (Konstruktivismus) と呼んでおり、この構成主義に基づく近代は、理性や倫理といった共通の認識土台を持たない脱中心化した世界として考えられている。このような近代観からは様々な帰結が生み出されるが、本書の構成に従い、合理性、リスク、という観点からこれを考えて行くことにしよう。もとより、近代を機能的分化によって特徴づける、ということはすでにデュルケム以来社会学の伝統となっている。しかし、以下の考察によって、ルーマンの言う機能分化が伝統的なそれとは一線を画したものであることが分かるであろう。

3 合理性

合理性への問いに関して今までの論述を踏まえると、ある矛盾があることに気づく。というのは合理性というのは普遍性を要請するという点において統一された姿として描かれなければならないものであり、その点で、閉鎖的なシステムの併存や差異を基調とするルーマンの近代認識とは相容れないからである。にもかかわらず、ルーマンが合理性の概念を保持し続けようとするのは、先に述べたような構成主義的認識を合理性の柱としようとしているからにほかならない。

まず、ルーマンは従来の合理性についてどのように考えているのだろうか？「ヨーロッパ合理性の歴史は (…) 連続体としての合理性の分解の歴史として描写できる」[S.53]とルーマンは言う。彼によると古典的な合理性はあらゆる知、理性が本質、善へと向けられている、というものであった。しかしこのような世界観は17世紀までに印刷術の普及による社会の複雑性の飛躍的な上昇によって、その矛盾を暴露することとなる。このころには、合理性は人文主義的な懐疑主義によるノミナリズムに取って代われ、さらに思考と存在の差異でもって世界を観察しようとする存在論的合理性の時代にはいる。18世紀の啓蒙思想は自ら作り出した差異に従っていた。理性的とされる言語や科学には必ずその対立物としてのロマン主義的幻想や、魔術が設定された。このように合理性をその対立物と対比することによってとらえる、ということはハーバーマスにいたるまで続けられている。しかしこのような合理／非合理-差異はルーマンの目からすれば、観察における盲点を不当に無視するものとして映る。

ルーマンは従来の合理性が社会の中に居ながらにして社会を観察するという問題、つまり、社会の部分こそが社会の全体を観察する、という点を見落としている、と批判する。社会内のあるシステムが社会全体を考察しようとするれば、その視界の中に「そのシステム自身が環境の中にある姿」が当然見えてくることになる。ここに、ある観察が用いているシステム／環境-差異を、再帰的にそのシス

テム自身が観察する契機が生じている。そして、ある観察が全体社会を視野に入れようとすれば、当然、自分以外のシステムが全体社会の中で観察を行っている姿が見えてくるのであり、他のシステムの用いる差異をも観察の対象にすることができる。つまり、全体-部分の関係を単なる包含の関係と捉えることを排し、部分こそが全体を観察することができる、と考えることによって、いかなる差異もが観察の対象となる可能性が生じてくるのである。このように考えると差異の一方として指示された従来の合理性も他の観察の対象とならなければならなくなり、その普遍的妥当性は期待できなくなってしまう。

この状況は従来の合理性概念にとっては破局を意味するものであるが、逆にルーマンはこのような状況にこそ、新しい合理性の端緒を見出している。ルーマンは、この何一つ普遍的妥当性を期待できない状況において、あらゆる観察の用いる差異が別の観察の対象となることに着目し、このような、ある観察が他の観察の対象となることを自らの提唱する「システム合理性」の中心とするのである。だから近代化との関連で捉えるならば、ルーマンの提唱する「システム合理性」は社会内で様々な形で観察が併存する状態によって初めて可能になる。それはかつてのような普遍性を持った合理性ではなく、パラドクスや盲点を伴った不完全な観察が独自に他の観察を観察し続けるという、いわば浮動的な観察の集合としての合理性を言うのである。

このような合理性に支えられた社会学的認識には一体どのような利点が、また、欠陥があるのだろうか？この合理性の評価については後でみることにする。

4 未来の描写からリスクの考え方への転換

近代に入り、ますます未来について予測するということ、また、今までの歴史を未来を見るための鑑として未来について考えることが叫ばれている。ルーマンが近代を機能分化したシステムの併存として捉えていることはすでに見たが、このようなシステムがより細分化した、過近代化した社会においては未来予測それ自体もそのあり方の変更を迫られることになる。まずルーマンは未来予測を「意図」や「目的」といった概念に支えられた因果づけの結果なのであり、それは本質的には観察というシステムの所産へと還元される、と考えている。更に、先に述べたように、必ず差異には盲点が存在するのであり、また、差異や指示は時間的に同時に行い得ず、その点で、因果は二次的に後づけされるものでしかない。この状況下では従来の意味での未来予測に妥当性はなくなる。

ルーマンはここでもセカンドオーダーの観察概念を用いている。近代以降、損害や帰結などの決断への帰責がどのように行われるのか、ということが二次的に観察されるようになってきている、というのである。ある決定への帰責はそれ自体一つの観察であり、ファーストオーダーの観察である。その観察を別の観察を用いて別の観察とつきあわせるということである。

もちろん、先にも述べたとおり、セカンドオーダーの観察といえども、正しい認識を提供してくれ

るわけではない。さらに近代化が進み機能システムが分化した社会においては社会を独断的にある姿で持って代表し得るシステムが存在しなくなる。つまり、かつての科学や倫理のように説得力を持って社会を描写し、それを社会に受け入れさせる権威があらゆるシステムから失われているのである。未来の描写は多くのシステムの観察の中に解消されてしまうのであり、その点において、我々は不透明な時代に生きているのである。ルーマンは近代以降未来予測はもう不可能となっており、それに代わって、決断に対する帰責の構造を柱とするリスク理論を提唱する。先ほどから見ているようにセカンドオーダーの観察の出現は社会を統一的に代表し得るシステムの突出を許さず、未来は複数の観察へと解消され、その不確実性は解決不可能の問題として残る。そこで、我々は現在において下される決断が現在の地平においては見えないリスクを常に含意しているものと見なさなくてはならないのである。

また、ルーマンは近代化の過程と帰責がますますシステム内でリスクとして処理されるようになっていく過程とが重なっていることに注目する。従来ならば神の手や自然、偶然などに外部準拠的にゆだねられていた未来は、近代化の過程、つまりセカンドオーダー観察の出現と共に、他のシステム（あるいは個人など）の決断に帰責されることになる。なぜなら、セカンドオーダー観察はあるファーストオーダーの観察（つまりある帰責）がどのように生みだされたのかを、そのシステム独自のコードにしたがって説明する必要に迫られるからである。例えば、今日の福祉国家においては様々な損害が「何もしなかった」という決断も含めて、国家・行政の決断に帰責されているのである。

5 終わりに——エコロジー問題への展望——

近代化を閉鎖的自己準拠的なシステムの分化と位置づけ、不完全な観察の併存する脱中心化した社会として特徴づけてきたルーマンであるが、このような近代はその近代自体がもたらした問題に対してどのように対処していけるのだろうか？ 以上のような考察の最後、第五章としてルーマンは「無知のエコロジー」と題してエコロジー問題を取り上げている。倫理や宗教、科学のようにかつては権威を持って未来を描写してくれた存在は今では数あるシステムのうちのひとつでしかなく、「統一された未来像」を提供してくれるシステムはもはやない。そこには、不確実で、今までの知識が通用しないということだけが確かな世界があるのみである。この世界においては未来の知は容易には供給されず、そこに生ずる無知にどのように対処するのかが問題となる。

本書では無知への対策として、コミュニケーションのテーマ設定を方向付ける道徳、脱パラドクス化のための方策としての文化、未来の不確実性を軽減するシステムとしての組織、などが個別に提出されている。しかし、よりルーマンの理論に忠実に考えるならば、これらの方策もシステム合理性のもとでは、他の観察の対象とされ、修正される可能性を受け入れなければならないことになっており、無知を解決してくれるわけではないように思われる。これらの方策にも盲点は存在するのであり、こ

れらの方策に内在する無知も問題になるからである。ここにシステム合理性の限界を素直に認めておかななくてはならないであろう。

しかしこのような批判だけではシステム合理性を十分に捉えられているとは言い難い。構成主義的な合理性をとることによる利点も大きいからである。たとえば、機能分化とそこから生じる差異の世界としての近代描写は、危機的な現在の状況を見渡すに当たって大きな助けとなるであろう。エコロジックの問題に関して、法、経済、政治などの様々なシステムが、十分に感受性を発揮しておらず、システム間での共鳴（システムとシステムが相互の作動を取り込むこと）がうまくいっていないことがますます明らかなことになってきている。また、様々な環境理論の主張がその提唱者の立場や理論的背景においてあまりに多く分裂し、かつ、隔絶しており、そのことが環境問題の不確実性を高め、捉えにくいものになっている。このような状況を統一的に描写しようとすることはもはや適当ではなく、差異の理論に取って代わられるべきであろう。その場合、従来の統一的な理解を指向した合理性を排し、差異の合理性を新しくとる必要がある。

また、ルーマンはシステム合理性の成果として、既存の観察では見ることのできなかった隠された構造を発見すること、をあげている。彼は本書の前年に発表された「批判的社会学 of 終わりに」という論文において、新しい合理性のもとでの批判の概念を模索している。彼は従来の批判概念に代わる新しい批判概念をうち立てる事により、セカンドオーダー観察に裏付けられた理論によって隠れた構造を明らかにし、イデオロギー批判をより洗練されたものにできる、と述べている。セカンドオーダー観察によって「『隠された』構造と機能に対する関心を追求することもできる」[Luhmann 1991:S.150]。ただし、「観察者は自分自身を自分自身の観察によって観察しなければならないし、また、他の観察者に観察させなければならない」[Luhmann 1991:S.150]。結局のところ、我々は自らの盲点を克服することはできない以上、自らの観察にも盲点が存在する、ということをはきまえる、ということによって満足しなければならない。このことによって、カタストロフに向かって歯止めの利かないように見える現代社会に対して内省を促すことはできる。その場合、問題が解決するまでは言わないまでも、少なくともシステム間で、その都度、より適切な共鳴のチャンスが増大することは期待できる。ルーマン自身「観察を観察する事による継起的なネットワークによってのみ、観察は可能になる」[S.218]と述べているが、このような観察のネットワークがどのように実現するのか、を模索することが新たな差異の合理性のもとでの課題となるであろう。

引用文献

Luhmann, Niklas 1991, "Am Ende der kritischen Soziologie," *Zeitschrift für Soziologie* 20. S.147-152

また、本書の英訳版 Niklas Luhmann, translated by William Whobrey 1998, *Observations on Modernity*, Stanford University Press を参照した。

(こじま たけし・修士課程)